



発行日 = 2007年10月25日 発行人 = 面出 薫 編集 = 田沼 彩子・小川 祐樹・矢野 大輔
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティングプランナーズ アソシエーツ内 (田沼 彩子)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail : office@shomei-tanteidan.org <http://www.shomei-tanteidan.org>

照明探偵団通信

vol.29 Shomei Tanteidan Tsu-shin

海外調査レポート

中欧調査 水辺に佇む三都市
リュブリャナ・グラーツ・ウィーン
(6/6-13)

照明探偵団倶楽部活動 1

キャンドルナイト @OMOTESANDO
Eco-Avenue 開催
(6/22)

照明探偵団倶楽部活動 2

第 32 回街歩き
大人な夜の newName 東京ミッドタウン
(8/1)

照明探偵団倶楽部活動 3

第 33 回街歩き
港町ヨコハマの光
(9/28)



中欧調査 グラーツ

中欧調査 水辺に佇む三都市 リュブリャーナ・グラーツ・ウィーン

2007.06.06-13

田沼 彩子+村岡 桃子

スロベニアの首都・リュブリャーナと聞いて、どこのことかわかりますか？今回この中欧の小さな町に飛び火した照明探偵団のイベントをレポートします。

そしてリュブリャーナからオーストリアのグラーツ、ウィーンへと「水辺に佇む都市」という共通項を持つ中欧三都市の照明環境を調査してきました。

■世界照明探偵団 in リュブリャーナ？

「リュブリャーナで照明探偵団を紹介したいという人たちがいる。」そんな誘いが舞い込んだのは今年の3月初めのこと。世界照明探偵団・ペオグラード支部のアレクサンドラの紹介で、スロベニアの首都・リュブリャーナで行われるライトフェスティバルの一環として照明探偵団のイベントをぜひやりたいと言う。

まずはリュブリャーナの人たちに照明探偵団の活動を紹介しつつ、興味を持ってもらえるような展示会のコンテンツが必要だろうと考えた。最終的には2つのギャラリーで照明探偵団の活動を紹介します。パネルと世界各都市の調査記録「World Lighting Journey」をそれぞれ展示すると同時に、関連するレクチャーを行い、リュブリャーナの「光の英雄と犯罪者」を探る街歩き、そしていくつかの対象物に即席で光を当てる「ライトアップニンジャ」を行うという欲張りな企画がまとまった。



メイン会場となった Kresija Gallery



地下道での”ライトアップニンジャ”



リュブリャーナでの初街歩き

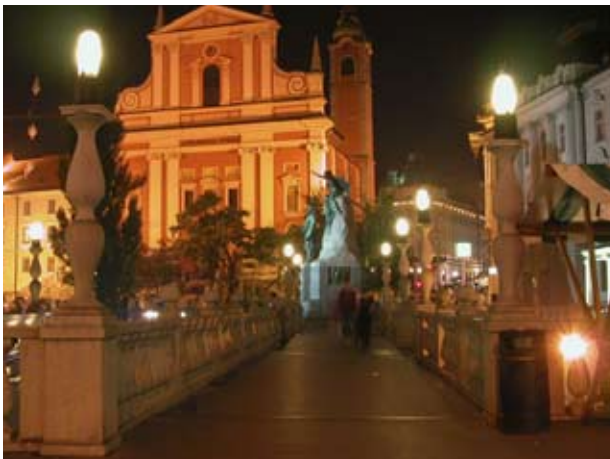
■リュブリャーナの英雄と犯罪者を探せ！

リュブリャーナはオーストリアとイタリアの間に位置し、スロベニアの首都機能を全て持ち合わせながらも、赤い瓦屋根の美しい町並みが広がる古都だ。

夕暮れ時にリュブリャニツァ川沿いに憩う人々が灯すほのかなあかりと、ライトアップされた歴史的建造物。コンパクトにまとまった町に点在するめりはりの利いた明暗が、心地よいリズムをつくりだしている。



リュブリャーナ城からの夕景



新市街と旧市街を結ぶ三本橋 - 正面にはフランシスコ教会

新市街と旧市街を結び、街の中心に位置する三本橋トロモストウィエは建築家ヨジェ・プレチニックの設計だ。図書館や公園から川沿いの遊歩道に至るまで、プレチニックの設計によるものが町のここかしこに見られ、景色に統一感をもたらしていた。

三本橋に程近い Kresija Gallery が今回の探偵団イベントのメイン会場。活動を紹介するパネルが全てスロベニア語に翻訳されて並んだ会場でレクチャーも行われた。同時に、少し離れた KUD Gallery では「World Lighting Journey」の展示会が開催された。

夜は地元の人たちと一緒に、初のリュブリャーナ街歩きへ。参加者約 30 名はグループに分かれて「光の英雄と犯罪者」を探る、探偵団のフィールドワークを体験してもらった。地元の建築家や自ら照明デザイナーと名乗る人まで現れて、一緒に夜の街を歩く。三本橋など主要な建造物はライトアップされているが、投光器で無造作に照らされているだけで繊細さには欠けるので“犯罪者”として糾弾されることに。



プレシェーレン広場に続く裏通り

プレシェーレン広場に続く裏通りは、中心部にありながら、閉店後のショーウィンドウのあかりと控えめなネオンサインがひっそりとした夜の景色をつくる。この静けさが地元の人たちには“英雄”のようで、しきりにシャッターを切っていた。

夜も更けて、霧に霞んだ通りが薄暗いオレンジのナトリウム灯のあかりにぼんやりと浮かぶ光景は、どこか退廃的で私がイメージした中欧の街そのものだった。

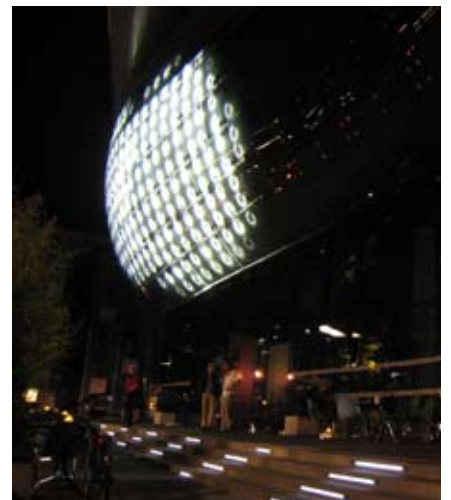
世界照明探偵団の旗をまたひとつ立てたような気持ちで、私たちはリュブリャーナを後にした。

■新旧の交錯する街・グラーツ

オーストリア第 2 の都市・グラーツへと向かう。電車での国境越えは気が抜けるほど呆気無い。グラーツは街の中心をムーア川が流れ、古くからの落ち着いた佇まいが今なお残る。一方でクストハウスなど新しい建築がアートの発信地の役割を果たし、文化都市として発展しつつある。夕暮れ時に時計塔のある城山に上がると、街を一望することができた。中心である市庁舎からヘレン通り沿いの建物のファサードがアップライトされ、あたたかなあかりが徐々に灯っていく様子は本当に美しい。その景色の中にあって、ムーア川沿いに建つクストハウスは、まるで古い街並みに突如として降り立った宇宙船のようだ。外壁に取り付けられた蛍光灯がにぎやかにオペレーションされて、真っ白な光を投げかけていた。

街中では、とにかくリフレクション効果を利用した照明器具が目についた。市庁舎前広場には巨大リフレクションポール灯が並んで均一な明るさを確保していたし、トラムの走る通りのカテナリー照明もリフレクションを利用したものだった。

リュブリャーナと比べて整備された光環境が文化都市の顔を演出する一方で、残念だったのは川沿いの景色。昼間は憩いの場であるムーア川沿いが、夜は漆黒の闇と化していた。いつか心地よく照らされたムーア川の夜を歩いてみたい。



ムーア川沿いに建つクストハウス



暴風雨庭園内遊覧之図

時計塔のある城山から街を一望する



市庁舎前広場の巨大リフレクション

■ドナウの流れに佇む街・ウィーン

最後の目的地、ウィーンへ。リュブリャーナ、グラーツと比べて圧倒的に都市の規模は大きくなり、豊かなドナウの流れのもとにハプスブルグ家の栄華が築いた都が広がっていた。

ドナウ運河沿いを歩くと、新・旧市街の違いが良くわかる。旧市街側には、投光器で照らされた重厚な石造りのファサードが軒を連ねる。一方で、対する新市街側にはガラス建築にLEDのオペレーションが施された新しい建築がそびえ立つ。

ウィーンには近代から現代にかけて、ユニークな昼光の取り込み方をしていたり、ファサードに特徴を持つ建築が多く見られる。オットー・ワグナーのウィーン郵便貯金局は、天井の半透明なガラスから降り注ぐ光と床のガラスブロックがまるで光天井・光床のようだ。石のファサードを持ちながら、内側には鉄、ガラス、アルミといった当時の最先端だった素材が巧みに使われているせいか、全体としては軽やかな印象だった。

シュテファン大聖堂に面して、強烈なミラーガラス張りの外壁を向けるのはハンス・ホラインのハースハウス。建設当時は前衛さゆえに批判対象となったようだが、現在ではすっかりウィーンの顔のひとつとなっている。

19世紀末にガスタンクとして使用された建物が、集合住宅やショッピングモールから成る複合施設として生まれ変わったのがガゾメーターだ。外側のレンガ壁はそのまま内側に住宅がつくられたため、住むための開口部としては極めて不十分に見えるが、この歴史的建物に新しい形で住むということが一種のステータスでもあるらしい。夕暮れに窓あかりが灯る様子は、その誇りのようにも見えた。

シュテファン広場周辺は店舗が閉まってもショーウィンドーは煌々と照らされている。古い石造りの街並みに対して、ネオンサインや看板照明などの光が思いのほか多いことに気付いた。

揺るぎない伝統を持つ街だからこそ、古き良きものへの尊敬と新しさへの憧れ、その二つの狭間で人々は行き来するのかもしれない。

(田沼彩子)



ガゾメーターの窓にあかりが灯る



シュテファン広場周辺の夜



ドナウタワー展望台よりウィーン中心部を望む

キャンドルナイト@ OMOTESANDO

- Eco Avenue 開催

2007.06.22

“でんきを消してスローな夜を。”100万人のキャンドルナイトは環境や省エネ、現代社会のライフスタイルについて考え直すとともに、人間本来の時間のありかたを見つめるきっかけとして、環境NGOが中心となって発案したイベントですが、主要施設がライトダウンされたり、各地でキャンドルを使ったイベントが行われたり、とその輪は年々全国に広がっています。キャンドルナイトの公式ホームページによると、今年の6月22日から24日の3日間に登録されたイベント数はなんと897件！今年も多くの人がキャンドルのほのかなあかりとともに、夏至の夜を過ごしたようです。



キャンドルカップを持って人が集まる



看護協会階段でのインスタレーション

照明探偵団では2003年に原宿キャットストリートでの企画をしたことから始まり、2005年からは表参道でのキャンドルナイトの開催に携わってきました。

参加メンバーは面出団長のかけ声のもとに集まった美術大学を中心とした学生たちや照明探偵団に所属する社会人。当日のボランティアスタッフも含めると総勢約300名の大所帯でこのイベントに臨みました。

『キャンドルナイト@OMOTESANDO - Eco Avenue』の三本柱は、表参道ヒルズの裏にある神宮前小学校の子供たちによる“キャンドルパレード”、通りに点在する“キャンドルインスタレーション”、そして表参道沿いのカフェ約20店舗での“キャンドルカフェネットワーク”。子供たちのキャンドルパレードで元気にイベントが始まると、それぞれのインスタレーションや周辺カフェに置かれたキャンドルに火が灯ります。

3月ははじめから何回ものワークショップを重ね、各チームが知恵を振り絞った作品があちこちで灯り始める光景に、通りを行く人たちからも歓声が上がっていました。



表参道ヒルズのブライトアップウォールも消灯



表参道ヒルズの水景にもキャンドルが灯る



ラルフローレン前のキャンドルツリー

今回の表参道で特筆すべきこと。それは20時から22時という2時間の消灯に協力してくれた施設や店舗が大幅に増えたことだと思います。表参道ヒルズの長さ250mのLED『ブライトアップウォール』が消灯したのをはじめ、いつもは白く光り輝くブランドショップも少しずつ消灯や減灯に協力してくれました。

いつもより少しあかりを落とした表参道を背景にすると、キャンドルのほのかで繊細なあかりが浮かび上がります。

この表参道に灯った火を絶やすことなく、来年につなげていきたい。そんなことを思った夏至の夜でした。

(田沼彩子)